

長崎メディア・平和講座「伝えんば」

2012年4月18日

第1回講座 「被爆者運動の始まり」 廣瀬方人さん

<事務局から>

廣瀬方人（ひろせ・まさひと）さん、「原爆青年乙女の会」会長。また、40年以上被爆者の声を掘り起こし、毎年出版している「長崎の証言の会」代表委員。元高校の英語教師。創成期の被爆運動を知る貴重な証言者。

<導入>

今年、高校生平和大使が始まって15回目。発足したころの出来事を思い出した。高校生たちが鉄橋で署名を集めていたら、通りかかった被爆者（かなり著名）が『あんたたちに何の分かるかね』と言い、高校生が涙を流した。という記事が掲載された。「何と心ない被爆者か、」という視点だった。私は高校生の平和運動を“希望”だと思っているが、同時に『あんたたちに…』と言った被爆者の心が本当によく分かる。言葉でいくら言っても言いつくせない67年前の被爆体験。「簡単に分かるか」というのは被爆者の心の底にあると思う。どんなに言いつくせなくても伝えないといけない義務、責任があると強く思っている。そういう思いで今日は話をさせて頂く。

<被爆体験>

1944年の4月に学徒動員令が出て14歳以上の少年少女は学校で勉強するより働けとなった。長崎は三菱の町。私は旧制県立長崎中学に通っていたが三菱重工長崎造船所造機製作部幸町工場に学徒動員された。空襲警報の度に、防空壕に走った。44年の暮れ頃からナーバスな状態になっていった。米軍機は編隊を組んで上空を通過するものの、実際は当時あまり空襲を受けておらず「長崎はクリスチャンが多いから空襲を受けないんだ」という噂も広まっていた。私は戦後に洗礼を受けた。

造機制作部はスクリューやタービンなど軍艦や商船の内部を作る所。1945年6月半ば、幸町の小さな機械（旋盤200台など）だけを戸町トンネル工場に運び込んだ。①工場と呼ばれていた。戸町トンネル工場は入口に大きな防空壁を立て、中は封鎖していた。バスは国分町に迂回していた。私は結核を患っていたので、軽労働に回り、トンネル入口にある勝廊寺で事務作業をしているとき被爆した。

（投下機の）爆音は聞こえず、いきなり光が入ってきた。空襲と思わず、机から立ち上がると、だっつと音がして机の下に伏せた。シャツの袖を肩までまくりあげていたので、飛んできたガラスで少しけがをした。

8月9日の朝、従兄（ノブオ）とともに自転車で桜馬場の自宅を出た。従兄は駒場町（現・松山町）の三菱の下請け工場働いていた。家に戻らなかったのも、翌10日から伯母が探

しに行った。伯母は5日後、高熱を出し、鼻、歯茎など体中、血が出て死んだ。やけどもけがもしていなかった伯母が死んだ。結局ノブオは見つからなかった。

長崎女子商業に通っていた同級生（同じ歳）の女の子も（動員先で被爆し）、膝をけがしただけで山を越えて逃げて帰ってきたが14日に死んだ。高熱、鼻血、歯茎から出血、脱毛…同じ症状だった。近所でも次々に人が死んでいった。『新型爆弾には毒ガスの混じっとなげな』そんな噂が広まった。8月7日の朝日新聞に「広島に新型爆弾」と出ていたので、みんな長崎にも広島と同じ新型爆弾が落ちたのだろうと思っていた。伯母は、伊良林小学校の校庭で茶毘に付した。

市内の様子は、金比羅山を境に浦上方面と他方面は全く違っていた。その日、救援隊を組織するから帰るなど言われていた。戸町にもけが人が運ばれてきた。その後、浦上方面は全滅で、救援隊が行けるような状況ではないことがわかり、夕刻、桜馬場の自宅に帰宅した。

長崎原爆の基礎的な情報は原爆戦災誌のダイジェスト版「ナガサキは語りつぐ」に掲載されている。この本は長崎原爆資料館にある。

<敗戦、それからの生活>

8月15日、正午に大事な放送があるからラジオのある所に集まって聞くようにというおふれがあり、祖父の家に集まった。その時は雑音であまり聞き取れず『天皇陛下が頑張れ！っていいよとなげな』と言われたが、夕方になって日本が戦争に負けたことが分かった。あんなに先生方が『勝つんだ、頑張れ！』とおっしゃられていたのに、「戦争が終わるのは、なんてあっけないものなんだ」、それが第一の感想だった。

行政もかなり混乱していた。防空壕にいろいろなものを蓄えていたが、米は少なく、野菜や芋の茎、サツマイモを水で焚いて、手の平に1杯の米をすくって入れた雑炊を食べていた。弟やいとこなど9人くらい家族がいて、どんぶり5～6杯の雑炊を食べても、10分後にはすぐおなかがすいた。戦争が終わり空襲がなくなったのはほっとした。

8月25日頃、かまど用の薪拾いに旧制県立瓊浦中学（現長崎西高校）に大八車を引いて行った。倒壊した体育館の横に吹き寄せられた女性の髪の毛が私の背丈の何倍もの高さに積み上がっていて覆いかぶさるように風で揺れていて非常に不気味であった。焼け跡をずいぶん歩いたので、『俺も、かなり放射能を浴びたんだ』と思い直した。

また、賑橋の付近（現親和銀行の前あたり）を日暮れ時歩いていると雨が降り出して散らばっていた骨から発生したリンに着火し、取り囲まれた。「火の玉だ」と怖い思いをした。当時、その辺りは遺体を集めて焼いた場所であった。

<被爆者の暗い時期、放置された被爆者>

大学進学のため1947年（昭和22年）から52年（昭和27年）まで長崎を離れ、京都で過ごした。1954年3月「ビキニ水爆」を皮切りに原水爆反対運動が盛り上がりを見せ始めた。55

年8月に広島で第1回 原水爆禁止世界大会が、翌56年には長崎で第2回原水爆禁止世界大会が開かれた。原爆投下から原爆医療法が制定されるまでの11年間、被爆者は放置されていた。その原因の一つはマンハッタン計画の副責任者ファーレル准将が東京で行った記者会見の言葉。『原爆は高度で爆発したので降下した放射線はない。死ぬべき者は全員死んだのもう被爆者はいない』という言葉。このあたりの状況は、「封印されたヒロシマ・ナガサキ 高橋博子 著」に詳しい。そしてプレスコード（1945年9月から52年4月）。日本国内でも「被爆者」は目隠しされた。長崎には被爆者がたくさん住んでいたが、みんな生きることで精いっぱいだった。放射能を浴びた人、やけどを負った人は治療されず、生活にあえいでいた。原爆反対、核兵器廃絶運動を行う状況ではなかった。

そういう状況の中、山本薩夫監督（山本監督は誤り。亀井文夫監督）の「世界は恐怖する」という映画を、私は京都だったか長崎だったかで見たと（昭和32年なのでおそらく長崎）。被爆当時胎児だった人たちの映像。黒い瞳がない子供、無脳児、指がないなどの障害児が次々に生まれたという核兵器の放射能による非人間性を告発する映画だった。しかし被爆者にとってはとても怖い映画。「こんなことあるの？」とても映画の撮影に協力する状況ではなかった。

「被爆者と結婚すると、片輪（奇形児）が生まれる」「遺伝する」などの噂が広まったのも、被爆者が差別され疎外された一つの原因。どうして被爆者が差別されるようになったか。5つあげてみた。①「放射線の胎児への影響」体内被爆を受けた人はほとんど死産だった。原爆小頭症の子供のグループは長崎にもあった。当時の登録は6人か7人程度。なぜならほとんどが死産だったから。②残留放射能による障害。③「被爆者のそばにいくと移る」「遺伝する」という根も葉もない噂。④近郷からの救援者が自宅に帰った後、数日後に発病し、得体の知れない病状で死亡する。⑤そういうことが新聞報道された訳ではなかったが口から口に伝わって被爆者自身が内心の不安と恐怖にかられ、差別を恐れて自ら封鎖してしまう状況となった。

被爆者自身が「爆弾が落とされた時に長崎にいたと口にすると差別される」と思い、体験を封印した。戸町トンネル工場で一緒だった同級生が10数年前、「被爆者健康手帳を取得したいから証人になってくれ」と来た。「なぜ今まで手帳を取らなかったのか」と聞くと、「娘の結婚に影響が出たらいけないから、被爆者と言わなかった」という。長崎にはそんな人がたくさんいる。

<被爆者運動にかかわって>

1952年春、県立長崎工業高校に英語教師として赴任。53、54年は長崎市立長崎高校（夜間、桜馬場中学校内）に希望して転勤。生徒はとても一生懸命勉強していて働きがいがあった。文芸部を担当した。

54年3月、ビキニ水爆実験。その頃から、被爆者を治療しようという動きが次第に起こってきて、昭和27年、長崎大学の調（しらべ）来助先生が被爆者無料治療を始めていた。私

自身も「何かしないといけない」という思いがわいてきた。当時長崎には色んな文化サークルがあった。例えば「ロマンローラン読者の会」「婦人公論読者の会」「生活を綴る会」「げんこつの会」。そんな文化サークルを集めて、原爆に関する何かの反対運動を起こしたいと思ひ会合を持っていたが記録が残っていない。このあたりのいきさつは、1996年長崎市・原対部が編んだ「長崎原爆被爆50年史」に詳しい。

昭和28年、長崎市婦人会が10万円を目標に被爆者救援募金を始めた。その頃、小林ヒロ県議とともに講演会を開いた記憶がある。

昭和28年、上半身に大火傷を負った山口仙二さんは、長崎大学で調先生に皮膚の移植手術を受けた際、治療費が全額募金で賄われていることを知った。国による被爆者治療を求めて東京まで行ったこともある。

被爆者と言いだせない。肉体的にも苦しい生活の中で、被爆者たちが少しずつ知り合いになっていった。被爆後、下半身不随になった渡辺千恵子さんの油屋町の自宅に被爆者の女性5人が集まり、お互いの体験を話し、生活の苦しさを打ち明け慰めあった。それが「長崎原爆乙女の会」のはじまり。

昭和30年山口仙二さん達が「原爆青年の会」を発足。山口さんは、調医師から「入院中の被爆者の名簿作り」依頼され、その名簿がのちの「長崎原爆青年の会」結成時に役に立ったと語った。

1955年、第1回原水爆禁止大会が広島で開かれた。「次は長崎だ」という話になったが、長崎には大会の受け皿になる組織がなかった。あったとすれば乙女の会と青年の会くらい。その大会の受け皿になるために、当時、原爆で家族を亡くして市議会議員になった杉本亀吉や小林ヒロ県議会議員が中心となって「原水爆禁止長崎協議会」が発足。会長は形だけです長崎大学学長の古屋野宏平さん。松尾久吉三菱製鋼所労組委員長（事務局長だったかもしれない）。私は事務局次長に就いた。

また被爆者の無料診療や寄付による診療が始まった頃、同時に被爆者を捜し出そうと民生委員が動き出していた。元軍人の香田松一民生委員協議会長。怖いおじさんだった。その人も原水爆禁止長崎協議会の中に入った。

私は当時、長崎県高教祖の専従執行委員をしていた。教師になってまだ3年目。25歳の時。「どうしても手伝いたいので出向させてほしい」と申し出て11月くらいから組合の仕事はやらないで原水禁世界大会実行委員会準備会に毎日専従で出るようになった。実質的には資金集めから関わり取り仕切っていた。鉛筆1本（1円か50銭）を買ってもらおうと各学校を小林ヒロ県議と回り、鉛筆1000本、2000本とか買ってもらって、資金を集めた。何万本か買ってもらった。正式な大会実行委が発足したのは56年6月。それまでの準備に走り回った。

一方で世間の注目は、長崎よりも広島に集まって行った。この陰には永井隆博士の影響もあったと思う。『長崎の鐘』が昭和23年に発行されて昭和26年に亡くなるまで17冊許可された。異例。占領軍にとっては永井博士の本、主張は占領政策に利用できると思われたか

らだと私は思っている。

長崎と広島は原爆に対する姿勢が明らかに違っていた。広島大学と長崎大学のリーダーシップも違っていたのではないか。広島大は医学部の先生たちが中心に反核の姿勢で被爆者の調査をしていた感じがする。また中国新聞と長崎新聞のリーダーシップにも違いがあったように思う。

事務局で仕事をすると、婦人会や青年団、さまざまな文化サークル、市議会議員のグループが違いを超えて、原水禁世界大会を成功させようと動いていた。市議会では杉本亀吉、辻本与吉、小佐々八郎などの被爆者や長崎原爆青年乙女の会などが大会成功に協力した。ただし、被爆者たちが先頭に立った訳ではない。なぜだろうという疑問を私はずっと長い間持っていた。

市議会議員は「特別都市法」の延長や被爆者の治療援助を求めて国会陳情を行っていた。反核、反原爆と必ずしもいえなかったかもしれないが、「広島が国から支援を受けるなら、長崎も」と、広島のを追うように運動していた。被爆者運動といいながら、原水禁大会を支えたのは行政、婦人会、市議会議員たちの運動があった。

<第2回原水禁大会 56年8月、長崎>

第2回大会までには中国、旧ソ連も核実験を行っていた。日本中が昭和20年代半ばから30年代にかけて、核実験による放射能を帯びた灰を浴びていたのだろう。第2回大会には中国、旧ソ連の参加者が多かった。米国の原爆を非難し、被爆者のために300万円もの救援寄付を行った。

大会分科会で米国の牧師がいた。『15歳のとき長崎で被爆した被爆者だ』と話す、『えっ、被爆者が生きていたとは知らなかった』といわれた。

被爆者としての自覚はなかったが、1969年に長崎証言の会が発足。私は初代の事務局長になった。色んな被爆者の聞き取りにまわり、被爆者と接触して証言を聞くようになる中で、自分が被爆者であるという自覚を段々深めていった。自分が被爆者であることをだんだん自覚していった情けない被爆者。でもかなり多くの人がそうだったのではないか。

第2回大会で被爆者のことを英語で「patients（ペーシェンツ=患者）」と呼んでいた。「survivors（サバイバーズ=生存者）」と呼ぶようになったのは、ここ20～30年のこと。80年代になってからかもしれない。

50年間、被爆者運動にかかわり、初めは日本人でも「被爆者が生きています」と知らなかった人が多かった時代。被爆者が50年間、訴えてきたことで、被爆者がいて、原爆の被害や放射能の怖さを多くの人に知ってもらえるようになった。50年間、かかわってきたことは意味があった。

第2回大会のスローガンは「原水爆禁止」「被爆者救援」。その二つが両輪になって被爆者運動が動き出した。今、50年間、訴えたことは無駄ではなかったという思いで生きている。与えられた命。体験を訴えていくことが継承の原点になる。